

特 249 420
327 433

昭和十七年度

麥作耕種基準

豊原村農會



始



特249
327



大東亜戦争の完遂と

皇國農民道の高揚

豊原村農會長 那須哲太郎

必 行 事 項

- 一 播 種 期 の 促 進
- 二 種 子 の 消 毒
- 三 肥 分 施 施
- 四 病 害 の 防 除
- 五 酸 性 土 壤 の 中 和
- 六 培 土 の 勵 行

悠久に三千年 世界に冠絶する國体の精華と歴史を有する帝國
 が米英に屈服すべきか 進んで彼等を屠るべきか 晴雲低く大東亜の空を掩ひ一億同胞切齒扼腕して決断の日を待った時 辱くも宣戦の大詔を拜して感激措く所と知らず決然破邪顕正の利剣を執つて立つたのである。

かゝる英珠湾にマイリッピンに香港にマレー半島ヒルマに長府洋に御成成の下草木も靡き蘇々たる大戦果と共に遂に大東亜共栄圏建設の基礎は確立したのである。

然して將に建設の戦はこれから始まるのである。一億同胞認く必死力戦の兵士である。

旺盛なる戦闘精神は獨り皇軍將士のみに於て發揮するべきではなく祖國愛に燃ゆる農民にも最高度に發揮されねばならぬ。

「皇國農民は大和民族の血であり肉であり將入大和民族の將來を成るの母胎である」と信する。

特249
327

必	行	事	項
一	播	種	期
二	種	子	の
三	肥	の	分
四	病	害	の
五	酸	性	土
六	培	土	の
		勵	行
		和	除
		毒	進



大東亜戦争の完遂と

皇國農民道の高揚

豊原村農會長 那須哲太郎

悠久に三千年 世界に冠絶する國体の精華と歴史を有する帝國
 其に英に屈服すべきか 進んで彼等を屠るべきか 暗雲低く大東亜の空を掩ひ一億同胞切齒扼腕して決断の日を待った時 辱くも宣戦の大詔を拜して感激指し所と知らず決然破邪頭正の利剣を執つて立つたのである。

かくて英珠灣、フィリピンに香港にマレー半島ビルマに表前洋に御成成の下草木の繁き蘇々たる大戦果と共に遂に大東亜共栄圏建設の基礎は確立したのである。

然して將に建設の戦はこれから始まるのである。一億同胞總ては總力戦の兵士である。

旺盛なる戦闘精神は獨り皇軍將士のみに於て發揮されるべきでなく祖國愛に燃ゆる農民にも最高度に發揮されねばならぬ。

皇國農民は大和民族の血であり肉であり將又大和民族の將來発展の母胎である」と信ずる。



我等はこの光榮ある使命と重且大なる責任を双肩に負ふてゐる。

この光榮ある使命を認識しこの重大なる責任と完遂する者こそ眞の皇國農民である。

古前は皇國農民なりやとの問を受けたり時 我々は躊躇なく然りと答へるであらう。しかし平凡なるこの問ひに萬山の重みがあり 平然たる答に私は反省を懐いた。

皇國農民とは確固たる日本精神の持主であり日常生活で職域に於ての此の精神の具現者である。日本精神とは總てを大君に捧げ奉る心である。

この崇高なる精神に徹して生き 此の道に献身する人こそ眞の皇國農民である。

農民に於てこの精神を把握しこの高揚に近道する時何の不平不満があらう。

私は屢々各位の不満の声を聞きし里はまだ夜深し富士の朝日影し と歎いた江川柱庵の句を偲ぶのである。

我々は戦ひつゝ建設しつゝある。戦ふ以上は勝たねばならぬ。

今や將に日本民族興亡の秋である。勝たねばならぬ。如何なる犠牲も忍ばねばならぬ。

我々は喜んで國家の要求に應ずべきの秋である。

蓋し我々農民の憤起すべき秋は今にして他日くない。

生産條件は凡ゆる部面に於て恵まれてゐない。然し我等に不撓不屈の旺盛なる農民魂がある。

農民魂がある。叩けば門は開かれ求むれば又自ら道はある筈である。

この尊い魂を此の道を指か上にも発揚して大東亜戦争完遂に貢献することこそ皇國に生を享けたる農民の責務であると同時に光榮ある奉仕であると信する次第である。

戰場は外地のみではない。

我々の足元は既にして戰場である。

農民各伍よ 無執る戦士として一路増産の堅城へ肉迫し最後の勝利に向つて突撃されん事を。

(文責在編者)

實行組合名	硫	安	過磷酸石灰	トーマス燐肥	石灰窒素	高度化成
円定寺	一六一。	一三三。	二四。	三二。	二九。	
岩神	三八。	三三。	六。	九。	八。	
中姓寺	七七。	五九。	一三。	一八。	一六。	
寺前	一七二。	一四二。	二六。	三六。	三一。	
東谷	七三。	六一。	一一。	一五。	一四。	
大橋	四五。	三七。	六。	一三。	八。	
大ヶ島	七八。	六三。	一一。	一七。	一四。	
円張	三九一。	三一九。	五七。	七九。	六九。	
王徳	一三。	一。	一九。	二七。	二四。	
大笠上	一四六。	一一九。	一一。	三。	二六。	
官ノ木	五九。	四三。	八。	一四。	一。	
小山	七。	五六。	一。	一五。	一三。	
計	一四四。	一一七。	一一三。	三。	二六。	

備考 反當 硫安四×九五。石灰窒素六二。過磷酸四×三三。トーマス燐肥七六。高度化成九一。

實行組合名	作付割當			收穫目標高		
	小	中	大	小	中	大
円定寺	二一七六	三五四	一一。	四六八七	七六一	二七四二
岩神	五七二	五六	二。	一六八。	一一。	四五
中姓寺	一二六七	一五九	五八	二七七二	三四二	一三二。
寺前	二六八。	二八五	一一九	五七七三	六一二七	二七八八
東谷	一。	一三五	六。	二二二。	二九一六	一三六六
大橋	五九一	九三	三。	一一七二。	二。	六八。
大ヶ島	八。	三六八	七五	一七二五。	七九一二	一七一五
円張	五四一五	八。	二八。	一一六八三。	一七二。	六三九。
王徳	一八九一	二四五	八六	四〇七三。	五一九六	一九五五
大笠上	二二五八	二五。	九二	四八六三。	五八二五	二。
官ノ木	七八四	八	二三	一六八八。	一八二。	七五
小山	一。	一一三	四四	二二三三。	二四二九	一。
計	二。	二九三八	一。	四四七六九。	六三六六五	二。

麥作耕種基準

一、播種期の促進—適期播種 (試験成績参照)

一粒の麦でも多く収穫を得んと思ふは第一條件として適期に播種することであり、また労力不足の折柄無理な採種は思はれませんが目的は播種にあり、増産目的達成の爲にはこの無理と戦ひ之を征服しなければなりません。

其の方法として左記事項を勵行を奨励します。

1. 播種の適期 十一月十五日より十一月廿日

2. 簡易整地播の勵行

自家の耕作面積と労力を考慮して耕作面積の幾割かと此の方法を利用すること

3. 風呂湯浸種芽法

同法により処理して播けば五日位早く播種したことになる。

特にトビ虫発生地方には是非必要である。

二、種子消毒並に選種

播種の第一條件は良く充実した立派な種子を消毒して無病のものを播くこととあります。

其の方法として左記事項を勵行すること

1. 選種 唐箕選を三回位行ひ立派な種を選ぶこと

2. 種子消毒 消毒法には化学的方法と物理的方法とがあります。

1. 化学的方法

一 ウスフルン消毒法

ウスフルン四分八分を水一斗に溶し(一〇〇倍液)之に種を浸す
浸す時間は病名により異なるが概ね左記の通りでよい

大葉斑病 一時間—二時間

小麦腹黒穂病 二時間—三時間

條斑病 六時間

引上げた種は清水で洗ひか又はそのまま、で撥干にする。

同一の液で三回位は使用可能である。

二、昇液消毒法

昇液四分八分を水一斗に溶し(一〇〇倍液)之に種を浸す

特に條斑病に効力がある。同じ液で三回位浸すことが出来る

又浸す回数と時間は次の通りである。

第一回 一〇分

第二回 一五分

第三回 二〇分

引上げた種は清水で洗ひ流水又は池などに二時間浸す

使用上の注意

1 種子は乾燥したものを用ひること

2 消毒液の容器は金物を用ひてはならない

3 硫酸銅浸法 麦斑葉病 黒穂病 小麦の腥黒穂病に特効あり

硫酸銅ニ。冬を水一斗に溶して之に種を浸し三―五時間後引上げ種をよく清水で洗

ふか 又は水一斗に対して生石灰ニ。冬を入れた石灰水に五時間浸す

使用上の注意

1 消毒液の容器は金物を用ひてはならない

以上何れも溶液一斗で一回に一斗―二斗の種が消毒出来るものである

4 風呂浸法

一般に行はれてゐる風呂湯に浸す方法に付省察する

注意 化学的消毒を行った種も必ず風呂湯浸法を行ふこと

三 肥料の分施

肥料不足の時早く播けば中途で肥切れを来して減收は免れぬと云ふ人がありますがそれは種肥を過つた爲であります

一定の制限された肥料を最も有効に使用せんと思へば肥料の吸収期間を長くすることあります 小か寅には麦播を或る程度早く終りせして肥料を三回又は四回に分けて施すことあります

例へば硫酸を反当七メ施すとすれば元肥一メ五百 第一回追肥二メ 第二回に三メ五百等の如く元肥に少く追肥に次第に多くて途中の肥切れを防ぐのであります(施肥例参照)

元肥施用の注意

元肥は播くと同時に施すが理想であるが天候や労力其他の關係で播いた後でも差支ない但し播種後二十日以内には必ず施すこと

燐酸肥料施用上の注意

燐酸肥料は必ず元肥に用ふるのが理想である

多量の場合硫酸と混ぜて追肥に用ひてもよい

燐酸肥料は結実をよくすると共に 夏の初期の成育を促進する効力がある

元肥に燐酸と便はぬ時は生育が遅れ種も不揃ひ出穂が遅くなり恰も晩播同様の状態となる

トーマス燐肥を施す場合は時に硫酸 過燐酸石灰と混用せぬこと
草木灰 石灰窒素との混用は差支ない

過燐酸石灰に比べて遲効性である故に分早目に施用すること (肥料の性質) 参照
肥料不足の対策として草木灰 堆肥等を十分利用して其の成分を活用すること

四 酸性土壌の中和

酸性の害により麦の収量の減少してゐる向もあります。
土壌が酸性となつてゐる場合は施した肥料を損失し 又麦の生育に害を及ぼすのであり
ます。

稲の追肥として数年石灰を施した草のない田 及石灰を施した草のない畑には是非之
を施すことが必要です。

耕起前施す場合は反当三。一四。メ 播種後は反当一。〇。メ位を雁岐の横に施しなるべく
早く土壌に混和すること

此の場合に硫酸 過燐酸肥料の再補せぬことが大切です

三三月の頃 酸性の害を認められた場合は反當五。六。メの石灰となるへ、多量の水に溶して施
用すること

五 培土の勵行

従来培土は肥料を多量に施した時に多く行はれる習慣がありました。肥料不足の現今
に於ては其の肥料不足の対策として其の施した肥料の効力を増す点に於て又日光 通風
の關係と病虫害防除の点からも是非勵行することが必要です

六 病虫害の防除

本年も病虫害発生地区あり 之が防除には共同作業によつて其の徹底を期すること

(麦類の病害参照)

ノ トビ虫の防除

風呂湯浸法により雑草を行ひ 浸種前の種子一升に村砒酸鉛一五〇位をまぶりて播
種すること

(参考)

施肥例

施肥量の決定に就いては各農家に於て土質 肥層 品種 播種期等を考慮して決定すること
本考までに左に施肥例を二三示します

堆肥	人粪	石灰	硫酸	木通	計
二五〇	五〇	三五	六	一五	
二五〇	五〇	一五	六	一五	
一三五〇	二〇〇	一〇〇〇	七二八	三一七八	
六五〇	〇六五	!	九六〇	一六七五	
一五七五	一三五	!	九〇〇	二六一〇	

堆肥	人粪	高灰	硫酸	木通	計
二五〇	五〇	四〇	三	一〇	
二五〇	五〇	二〇	三	一〇	
一三五〇	二〇〇	六八二	八〇〇	二九三二	
六五〇	〇六五	四〇三	四八〇	一五九八	
一五七五	一三五	!	六〇〇	二三一〇	

堆肥	人粪	乾糞	硫酸	木通	計
二〇〇	五〇	四〇	三	一〇	
二〇〇	五〇	四〇	三	一〇	
一〇〇〇	二〇〇	一一八八	七二八	三二一六	
五二〇	〇六五	一一一五	三二〇	二一二〇	
一二六〇	一三五	五〇四	六〇〇	二四九九	

肥料名	堆肥	人粪	石灰	硫酸	木通	計
反用	三〇〇	五〇	六	一	〇	
元肥	三〇〇	五〇	六	一	〇	
追肥						
二月下旬						
三月下旬						
空乘	一五〇	二〇〇	一〇〇〇	七二八	二九〇〇	
燐酸	七八〇	六五〇	!	九六〇	二四九〇	
加里	一八九	一三五	!	六〇〇	二六二五	

小麦播種期と発芽及生育関係の調査

播種期	発芽期	発芽日数	出穂期	成熟期	発芽日数(生育期間)
十月二十六日	十月三十一日	五日	四月十七日	六月一日	一六九日
十一月五日	十一月十二日	七日	同 二十二日	同 三日	一六〇日
同 一五日	十一月二十七日	一二日	同 二十七日	同 八日	一五一日
同 二十五日	十二月九日	一四日	五月一日	同 一日	一四三日
十二月五日	十二月二十二日	一七日	同 三日	同 一日	一三二日
同 一五日	一月三日	一九日	同 五日	同 一三日	一二二日

播種期と施肥量試験

播種期	少肥料 (窒素一)		多肥料 (窒素二)	
	反当収量	同上比率	反当収量	同上比率
十二月五日	二〇一七	一〇〇	二四七六	一〇〇
十一月三日	二一八七	一〇八	二八三一	一一五
十一月十五日	二三一〇	一一四	三四一一	一三八

備考

同試験に於て少肥料の場合では早く適期に播種するが有利であります
 同表にて仮に六俵獲るには十二月十五日では窒素二メ五と要しますが十一月十五日では窒素一メ五で済むこととなります

硫酸分施肥試験成績

試験別	各期硫酸分施肥量			小麦反当収量	
	元肥	二月五日	三月十五日	平均	百分率
硫酸三回分施	一二四	三一二五	三一二五	二五二三	一〇〇
同 四回分施	一二五	二五〇	二五〇	二八四九	一一三九

備考

同試験の結果と見るに少肥料の場合には特に肥料は分施の必要がありません

硫酸の施用割合に関する試験成績

区別	期別			深	收	小
	元肥	一月中旬	二月下旬			
一	一割	二割	三割	四割	二九。四	二七。〇
二	二	二	二	四	二九。八	二七。三
三	二	二	三	三	二八。三	二七。〇
四	二	二	二	二	二八。七	二七。〇
五	三	三	二	二	二八。三	二六。九
六	四	二	二	二	二八。二	二六。四
七	四	三	二	一	二七。五	二六。四

備考 各区共堆肥三〇。〇ノ道燐酸石灰一。〇ノ硫酸里ニメと施す
収量は四ヶ年平均とす

赤岩土効力試験成績

試験区別	深	収量(四ヶ年平均)	比	率
培土セサルモノ	二石	二。三三	一〇〇。〇%	
二回ニ二三寸厚ミニ行ヘルモノ	二石	二。四六	一。五六%	

本年麥に配給される肥料の性質

一、硫酸アンモニヤ

純白色の結晶で水に容易に溶解する。窒素は二。〇%内外を含ま其の形態はアンモニヤ態である。水稻の場合アンモニヤ態のまま、で吸収されるが、麦作に於ては硝酸態に変化して吸収される。極めて速効性で一時に多量施すと流亡の危険がある。

配給の取扱は現在に於ては初期の生育を促すと共に生育後期の肥切れを防ぐ爲に施肥基準に依り数回に分施し尚後期の肥切れに相當の量を施し得るやうに計画的に使用することが肝要である。

硫酸は堆肥等の速効性肥料と共に施せば肥料相互の欠点を補ひ肥効を増す故に自給肥料と多量に施すやうに心掛けるべきである。

又、石灰 木灰 石灰窒素 トーマン燐肥のやうな石灰分を含んだ肥料と接觸するとアンモニヤを損失する故に注意すること。

尚、硫酸を運用すれば土壌を酸性にする故石灰を施して之を中和させて麦の酸性に依る害を未然に防がねばならぬ。

ニ 石灰窒素

黒色の微粉末で窒素二〇% 石灰分約六〇%を含む。

石灰窒素中の窒素はレヤミド態であつて之は植物に有毒である。

土壌中の水と粘土分の作用により尿素態となり更に細菌の作用に依りアンモニヤ態に変化して作物に吸収される。

又石灰窒素の分解速度は温度により異なり夏は数日、冬は二―三週間を要する。

施用法は整地、播種後に依つて異なるが硫酸に比べて肥効遅れる為少量の硫酸其他の速効性肥料とも用ひる必要がある。

石灰窒素は木灰 トーマス燐肥 石灰と混合又は共燻しても差支ないが 硫酸 速燐石灰 其他水溶性燐酸肥料と混合してはならぬ。

三 速燐 燐 石灰

速燐石灰は燐鉱石に硫酸を作用させて製造したもので燐酸石灰と副成分として多量の硫酸石灰を含む。

成分は可溶性燐酸一七% 一六% 一五% 一四%等色々あるが最近低成分のものが多い。

前記成分の約八割が水溶性である。

燐酸は根の伸長を助けて分蘖を促し初期の生育を旺盛にする働きがある故に元肥に施すか最も有効である。

硫酸と同様石灰分を含んだ肥料と混合してはならぬ。水溶性が不溶性に変わる為である。

四 トーマス燐肥

製鋼の際の副産物として枸橼酸可溶性燐酸一六%を含み其他石灰四八%を含む。

灰黒色の重い粉末である。含有燐酸は水に溶解せず土中で水と炭酸ガスの作用を受け徐々に分解して作物に吸収される。

従つて速燐酸より速効性で其の肥効も速燐酸に劣つてゐる。

施用上の注意として速燐酸より速効性で発初期の生育が劣る故に 少量の速燐酸と元肥に施し或る可早い機会に此の肥料を施すこと。

トーマス燐肥は石灰分を含む故に木灰 石灰窒素 石灰の混合は差支ないが硫酸 速燐酸 人糞尿 化成肥料 配合肥料と混合してはならぬ。

五 臨時配合肥料 三号

十貫中硫酸四九一。 速燐酸五九〇の割合で配合したものでアンモニヤ性窒素一〇% 可溶性燐酸七一八五%を含む。夏の元肥及追肥とする。

甲 乙 丙 丁の四種あり 甲は可溶性一七成分の速燐酸と 乙は一六成分 丙は一五成分 丁は一四成分を原料としたものである。木灰トーマス燐肥の採取石灰分を含んだ肥料と配合し

てはならぬ。

六 高度化成肥料

過磷酸石灰の原料たる燐鉱石に硫酸を作用せしめ同時にアンモニヤを加へ硫酸アンモニヤ過磷酸石灰の形態のもの、他燐酸アンモニヤの形のものを含んごる。

窒素は凡てアンモニヤ性で一七。％—一九。五。％ 燐酸は水溶性で九。一—九五。％を含む。

高度化成肥料一。メは硫酸ハ―九。メ 過磷酸九。メに匹敵するから此点を考へて施用量を定めろ。

べく燐酸を含む故元肥及初期の追肥に用ひるがよい。

七 特殊化成肥料

鉄や礬土が多くて過磷酸石灰の製造に向かぬ燐鉱石と硫酸と原料として作ったものである。

四種類あり各窒素はアンモニヤ性で七。％ 燐酸は一号一。％ 二号九。％ 三号八。％ 四号七。％

を含み其の中の八割が枸橼酸可溶性である。本肥料の窒素はよく効くが燐酸は効果可成劣る

故に過磷酸石灰を併用する必要がある。燐酸の肥効を考へると本肥料一。メ中硫酸三。メ五。百

過磷酸石灰二。メ一。メ五。百に相当すると考へてよからう。

八 エスサン肥料

之は味の素製造の副産物で窒素全量五五。％ この中の一。％がアンモニヤ性である。

夏肥には元肥として用ひるがよく 肥効は大豆粕に近い。

麥類の病害に就いて

病名	病原	徴候	要	予防	駆除	要旨
環黒穂病	ウエチラゴ、ヌードと称する黒穂病菌の寄生に因つて起る	本節節は開花中 本節の胞子が柱頭に粘着し発芽して子房内に侵入し菌糸の状となり種子中に潜伏し 夏の発芽と同時に再び活動し本病を起すものである。	ピレノフォーラ スラミニスと称する黴菌の寄生による 通常草丈四五寸に達した頃現はれる 黄白色の條斑となり 後に條斑は葉脈に沿ひ黒褐色となる 葉鞘及び稈にも全株発病する 本病は播種期がおくれろ程発症し易い	冷水温湯浸法が効力あり	一種子は播種前硫酸銅浸法を行ふ 二播種期を早めること 三風呂浸冷水温湯浸を行ふ	
銹病	黒銹病は タロシニヤ クラミス 黄銹病は ムタシニヤ クレマラム 赤銹病は スクレニヤ トリテンイナ と称する黴菌の寄生による 黒銹病の胞子は黒色を呈す			一 圃肥を避けること 二 五月上旬より六月上旬頃まで 三 五度の石灰硫黄合剤を二三 回撒布すること		
紅葉病						
2 黄銹病						
3 赤銹病						

	ウドン粉病 (白進病)	赤黴病	條斑病
<p>黄锈病の胞子は終黄色と呈し規則正しく排列す。 赤锈は前者より黄褐色を呈す。 本病菌は空気傳染性である。</p>	<p>本病はエリシフェー、クラミニスと云ふ黴菌の寄生により発生する。 被害部は始め白色の絹毛状の光沢ある斑点を生じて漸次之が増大して恰もウドン粉を撒いたやうな状態となる。</p>	<p>本病はキベレラザウベニチーと云ふ菌の寄生により発生する。 出穂期に降雨なき年は発生が多い。 本病が発生すると皮は最初灰白色となり、後に黄褐色となり、皮を逐じて漸次そのほか拡がり表皮全体に及び、</p>	<p>本病はセフワロスボリウム菌の寄生によつて発生するものである。 葉鞘及び葉身に褐色の條斑を生じ、出穂前結実期になると立枯病の如く枯死する。 種子傳染及夏芽などから傳染するものである。</p>
<p>一 排水をよくし日光空気の流通をよくする 二 多肥に通ずぬやうにすること 三 適期に播種し遅播を避けること 四 病害発見次第、五度の石灰硫黄合剤を撒布すること</p>	<p>一 排水をよくし陰湿を避ける 二 石灰硫黄合剤、ホルトール液を撒布する</p>		<p>一 種子消毒を勵行のこと 二 罹病地には表土を栽培せぬこと 三 堆肥、厩肥には罹病夏芽を用ひぬこと 四 発病の候、圃場の種子を採らぬこと</p>

420
433

昭和十七年十月三十日附本
昭和十七年十一月三日發行 (非賣品)
編輯者 岡山縣邑久郡重原村長沼三
印刷人 干 葉 治 郎
印刷所 佐藤印刷所
發行所 岡山縣邑久郡重原村農會

西岡 281

終

